| 道徳<br>朝・帰りの会 | 記事からすてきな生き方を学ぼう |
|---|---|

年　　組　　番　名前

☆右の記事を読んで、「いいなあ、すてきだな」と感じたことを書いてみよう。

☆あなたの考えるすてきな生き方とはどんな生き方ですか。

**コピーを児童に渡す際、下記の指導アドバイスの部分は消してからコピーしてください。**

※指導する先生や保護者の皆様へ

新聞には、前向きな生き方を紹介する記事やコラムがたくさん載っています。それをじっくりと読み、自分のことと重ね合わせながら考えることで、「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する」という道徳的な価値を学ぶよい機会となると思います。



## 交通事故乗り越え、夢を実現

# "片腕"の陶芸家 念願の窯開き

### 富士宮の中野さん

富士宮市出身の陶芸家中野幸司さん(30)がこのほど、同市猪之頭の陣馬の滝近くに「猪之頭陶房」を開いた。10年前に交通事故に遭い、右腕がほぼまひ状態になった中野さん。事故の後から陶芸家を志し、片腕が使えないハンディを乗り越えて「30歳までに独立する」という夢をかなえた。

事故で負ったハンディを乗り越え、陶芸家として独立した中野幸司さん＝富士宮市猪之頭の猪之頭陶房

## 土練りに苦労も「今の人生が一番」

中野さんは愛知県の大学に在学していた1999年11月、オートバイを運転中に乗用車と衝突。バイクが大破するほどの事故で、右腕の神経が切れて動かなくなり、感覚も失った。リハビリでひじを曲げられるようになるまで回復したが、今も感覚がないはずの腕に幻肢痛を抱えている。

中野さんは大学を中退し、いったん地元の印刷会社に就職。そんな中、趣味で通い始めた陶芸教室で陶芸家の道を見いだした。だが、教室の講師に相談すると「片腕でなれるわけがない」。それでも、2006年に浜松市の陶芸研修所に入学し、翌年には山口県の萩焼の作家に弟子入り。計3年間の厳しい修業に耐え、30歳の誕生日を迎えて間もなく、念願の窯開きを実現させた。

片腕で苦労するのは土練りだ。粘土からしっかりと空気を抜くために全身の力を使って練る作業だが、中野さんの場合、負荷がすべて左腕に掛かるため、手首などがけんしょう炎になることもしばしば。それでも、独立して自分のペースで制作できるため「だんだん加減が分かるようになってきた」という。

制作するのは「使ってもらう」ことを意識した食器類が中心。「やりたいことをやらせてもらえなかった」弟子入り時代にノートに書きためた作品を少しずつ形にしている。中野さんは「周りが心配するほど、片腕でも困ることはない。むしろ、事故があったからこそ、自分の道を見つけられた。今の人生が一番だと思う」と言い切る。